

長野市

人権教育啓発だより

第19号

発行

長野市地域・市民生活部

人権・男女共同参画課

長野市大字鶴賀緑町1613番地

電話 224-5032

平成30年度第4回人権教育指導員研修会 兼 第2回社会人権教育研修会(期日:11月16日、会場:長野市役所第二庁舎10階講堂)

演題 「私が出会った大切な人たち

～ドキュメンタリー制作を通して～

講師 野沢喜代さん（NPO法人 人権センターながの代表理事）

同和問題をライフワークに

同和問題に関わるきっかけは、人権教育ビデオ「ドキュメンタリー結婚」を作る担当ディレクターになったことでした。取材で多くの方とお会いしました。ある被差別部落出身の方は「自分の出身を公にしたことで、堂々と生きていく覚悟ができた」、また別の方は「差別された側が発言しないとこの問題は解決できない」と言われました。私は部落差別問題に出会った責任を考え、自分のライフワークとしてこの問題に関わり続けたいと思っています。

人権を意識する

私が最初に人権を意識したのはラジオ番組でした。戦争体験を詳しく聞いて放送するコーナーを担当した時です。激戦地だったニューギニアのビアク島のジャングルにはおびただしい遺骨が戦後60年近く経ってもまだまだ残っており、それを拾い集め茶毘に付しました。日本から5000キロ離れた島、赤紙1枚で召集され非業の最期を遂げた人の人生とは…。戦争体験を語り継ぐことも私のテーマの一つでした。身近なところに多くの人権問題があり、そういう所から社会を見ていく視線が大事だと思います。

実践できてこそ

「自分の娘が被差別部落の青年と結婚すると聞き猛反対したおじいさん。花が好きで花の痛さが分かるおじいさんが自分の娘の心の痛さが分からないのが不思議でならない。一日も早くおじいさんに会いたい。差別のない明るい社会にしてほしい。皆さん、力を貸してください…」小学校6年生の美穂さんの作文です。差別をなくす市民集会で読み上げ、人々の涙を誘いました。美穂さんのお父さんは「身についた知識を日常の中で実践や行動に移すことが出来て、初めて本当の同和問題が理解できたことになる」と言われました。実践できてこそ…。私はいつもこの言葉を忘れないように



自分の肝に銘じています。

「ドキュメンタリー結婚」のビデオを世に

「ドキュメンタリー結婚」は当初、美穂さんの取材は出来ませんでした。お父さんとお母さんの姿を見て気持ちが変わったと、取材が終わるという日に「私、お話してもいいです」と言ってくれ、勇気を持ってこのビデオに出てくれました。これを世に送り出す時は、世の中からどんな反応があるのか分からず、ナーバスになり眠れない夜も多かったです。しかし、このビデオをプラスの方向に捉えてくださった方が多く、今も同和教育で使われています。

部落差別解消推進法

平成28年12月に部落差別解消推進法が施行されました。この法律の意味は大きく、国会でなぜ部落差別という言葉を使うのかというのが議論になった時、「部落差別を鮮明にすることでより啓発効果を上げることが出来る。正面からこの問題を語れる環境を整えるためだ」という答弁、認識がされています。国は部落差別がまだまだあって、それは大事な解決しなければいけない問題だと認めている訳で、私たちの背中を大きく押してくれる法律です。これを生きたものにして、心新たに差別をなくす取り組みをしていくことが、私たちに課せられています。

自分自身を語ることの重さ

差別問題を考えることは、人間とは何かを考えることと同じです。同和教育は優れた人間教育です。この「ドキュメンタリー結婚」は、同和教育に関わっている教師、行政、いろんな方がメンバーに入っているビデオ制作委員会で議論を尽くして30分のビデオを作ったのです。その時の座長のような形でいらしたのが中山英一さんで、当時同和教育推進協議会の顧問でした。中山さんのことを放送の番組として作りたいとお話してから、中山さんにその気になっていただくまでに10年かかりました。自分の出身を不特定多数の人に、テレビというメディアで語るということはどんなに重いことかこの歳月が物語っています。2008年1月、中山英一さんのドキュメンタリーを作りました。

部落差別の本質を科学的にとらえる

中山さんは講演で、無駄のない言葉で差別の本質を指摘されました。私は迷った時など、その講演で語られたことや本を読み返して勉強します。人権問題、特に部落問題は考えたり勉強したりしないと分からないのです。分かっていない人に分かってもらうためには、きちんとした自分の言葉で話さないと理解してもらえません。科学的にそのことの本質をとらえることを自分に

課していかないといけないと思っています。

差別に遭ったときの相談・支え

差別に遭うときは孤独で一人。差別に遭った時、どこに持っていけばいいのか、どこに相談していいのかという問い合わせや相談が人権センターながのに入ってきます。人権センターながのに寄せられた相談の一部を当事者の了解のもとで放送させていただきました。人権センターでは、一年に一度、支援したり一緒に活動したり相談に来て関わりをもったりした大勢の方々や懇親を深めています。結婚差別にあつて悔しく苦しい思いをして、乗り越えてきた人たちも出てくれます。みんないい家庭を築いていて、私はその姿を見るのがうれしいです。

差別を自分のことと捉える

差別は特別なことではなくて日常の中に転がっています。家庭の中、地域社会、学校、職場にもあります。誰でも差別する側になるし、される側になるという入れ替わりの構造です。何も特別なことではないと思うと、人権問題、差別問題は自分のこととして捉えられると思います。見て見ぬふり、不作為というのはよくないです。これからも一人の市民として、ほんのわずかでも生きやすい社会をつくるために微力ながらも働いていきたい、黙らないで発言していきたいと思います。

第41回 市民のつどい(期日:11月26日、会場:長野市若里市民文化ホール)

演題 「今を生きるために大事なこと

～自分の感性と想像力を大切にしよう～

講師 江川紹子さん(ジャーナリスト)

最近のニュースから

日産のゴーンさんが逮捕され警察からのリーク報道、情報漏れ、想像を交えた論評が飛び交っている。報道では日産が被害者、ゴーンさんが悪者という構図を感じるが、それが正しいかは分からない。捜査が終わり、裁判が始まり、当事者がどういう主張をするか分かってこない、全体像は見えない。

初めから決め付けない

以前、厚生労働省で局長だった村木厚子さんが大阪地検特捜部に逮捕された事件があった。検察は郵便不正事件に村木さんが関わったとしたが、村木さんは全く関与しておらず係長が一人でやったことが裁判で明らかになり、村木さんは無罪になった。捜査の責任者が、証拠の改ざんまでやったことが分かり大騒ぎになった。このとき、この人が白か黒かは裁判が始まりいろいろな証拠や証言が出てはじめて分かってくる。初めから犯人扱いをして決め付けたりしないことを学んだ。

情報は記者会見の場で発表する

松本サリン事件では第一通報者の河野さんが犯人



扱いされた。警察は記者会見で発表しないで、記者会見以外の所でメディアに流していた情報に基づいて記事が書かれた。犯人がはっきり分かったことでメディアも警察も河野さんに謝罪をしたが、誰も責任をとらなかった。人々が知るべき情報は一部のメディアにこっそり出すのではなく、記者会見を開いて発表することが大事。それをせずに情報を小出しにしていくと、間違ったことが世の中に広まり誰も何の責任もとらないことになる。

自己責任とは

自己責任の元の意味は自分が被った損害、被害、喪失を他の人のせいにはしないことをいう。3年4カ月もの間拘束され続けた安田さん。どんなことがあったかを日記に記録するなど強い精神力を持っていた。残念なのは“自己責任”ということであるんなバッシングが行われた。安田さんは自分の責任は自分で引き受けており、誰のせいにもしていない。

自己責任の捉えの変容

自己責任をもう少し考えると、病気や怪我に備えての保険をかけておくとか、「冬山登山は自己責任で」というのは、自己責任だから救助に行く必要はないと言っているのではなく、警告として事前の準備をちゃんとやっていくようにという意味で使われている言葉。その後、戦争をやっている危険地帯所や、危険地帯での人道支援、或いはジャーナリストの戦地の取材にこの言葉が使われるようになった。冬山登山の自己責任と大きく違うのは、政治性を帯び政治案件になったこと。その後、貧困や過労死にまで自己責任という言葉が使われるようになった。

人権や命の問題を言い訳する風潮

「LGBTの人たちは生産性がない」と雑誌に書いた

議員がいた。問題を指摘されても批判をきっかけに自分を顧みることもなく、意見のようなことは発表したが、謝罪や撤回はなかった。自分は人権を否定したり、偏見を持って差別したりする意図は一切ない。ただ、生産性という表現を用いたことが誤解や論争を招いてしまった。或いは、結果として不快と感じ傷ついた方がおられることを重く受け止めているという言い方である。ただの誤解だと弁明する言い方をしばしば目にする。

オウムは時代のカナリア

自分たちの価値は絶対正しい、疑うことは許さない。カルトは元々は熱狂的な規模の小さな宗教的な集団を指す言葉だった。その特徴は教祖や教団の価値観が絶対的に正しくて、対立するものは絶対的に間違っていると善悪をきっぱりと分ける価値観が非常に強いことである。オウム真理教の事件は23年前だが、オウムは時代のカナリアだったのかもしれない。炭鉱に入っていく時、カナリアはガスが出ていると一早く感じ危険を早めに察知するという。オウムはそのような危険な存在としての象徴であったかもしれない。何事においても自分の感性と想像力を働かせてみていきたい。

平成30年度第5回人権教育指導員研修会 兼 第3回社会人権教育研修会(期日:1月24日、会場:長野市役所第二庁舎10階講堂)



演題 「外国人との共生をはかるために

～異文化理解について～



講師 横山ルッカスさん（長野県在住 日系ブラジル人3世 実業家）

外国人としてお伝えしたいこと

私は日本で育った外国人です。両親と共に5歳で日本にきました。国籍はブラジルです。私が外国人として感じたこと、親に言われたこと、外国人の考えや思いもお伝えできればと思います。

母親の凄さといじめの経験

小さい時は友だちがいない、しゃべらない、ゲームや折り紙ばかりしていました。

小学校4年生の時、いつもサッカーをやってスニーカー



はボロボロになっていました。貧しかったのですが母はみかねて靴を買ってくれました。ものすごく嬉しかったです。学校でのサッカーグループが私の新しく買った靴を下駄箱から取りだし、靴の中に唾を入れました。私はそれを何も言えずに泣いて見ていました。グループが去った後で靴を取りに行き、水道で洗きながら洗っていると、ガキ大将が来て「お前が俺と似ているような靴を買ってくるからいけないんだ」と言いました。私が外国人でサッカーが出来るのが気に食わなかったのです。そのいじめがあってから、背中を蹴られてアザになるようないじめにもあいました。バレないように隠しましたが、ある日、母に見つかりました。母は私の性格や少し体が大きかったのを見てでしょうか「カッコ悪いね、あんた。悪いことをしていないのなら正々堂々と立ち向かいなさい。自分が悪いことをしていたのなら謝りなさい。」と言いました。自分が間違っていないときは、「何でそんなことをするんだ」と言うことが大事だと親から教わりました。こんな当たり前のことでも、いじめにあっている子供は反抗できませんし、わからないのが現実なのです。

言いたいことは愛情を持って

日本のゴミ出しで、外国人は分別してゴミを出すことすら知りません。最近では工夫を凝らしゴミはこうして出すなどとポルトガル語の語訳を付けたたりすることもあります。ゴミ捨て場に要らないビデオデッキを出したり、燃えるゴミの日に平気で燃えるごみ以外の物を置くなどすることがあります。「最近引っ越して来た人たち」、「髪の毛金髪だし、教えても分からないから放っておこう」と遠くで見る人もいます。でも、話を通じなくても怒らないで「ノー、ノー」と言うのとではえらい違いがあります。外国人は「何か知らないけれどノーと言われた…」。「ノー、オーケー」と持ち帰る人もいます。日本人も外国人もどちらの側も少し理解をし合い、言いたいことを愛情を持って話せば、きっとわかってもらえるはずです。

外国人であることを強みに

外国人であることを強みにできないか、体が大きくてスポーツができるのだから水泳を極めようと考えました。中学までは100、200メートルの平泳ぎは長野県では無敵、高校は3番目くらい、インターハイにも出場しました。日本語は家では禁止でしたが自然に覚えました。ポルトガル語は母国語なので話せます。英語は全然できませんでしたが、これで英語をしゃべれるようになったら最高だと思い、あたかも英語をもともとしゃべれる顔をして英語を勉強しました。折り紙でも何でも作れるようにするなど、何事も極めようと思いました。外国人のルックスがあるからいじめられるのではなく、それを生かして雑誌のモデルをやればいいんだと、頭のシフトをすることです。

弱みを強みに変えるには

日本で生きていくには日本人に帰化した方が楽です。社会的な差別も受けないし、名前も漢字で表すかもしれません。でも、自分が外国人であるということをオープンにして、外国人でもやることをやればちゃんどできるということを証明する立場になろうと思っています。弱みを強みに変えるには一人の力ではなく、私が母の影

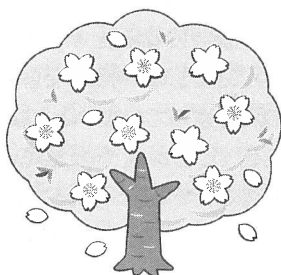
響を受けたように誰かとの出会いや影響を受け、周りの人の協力を得ないとだめです。そのことにより外国人がより輝くことができ、日本人にとってもよい経験となるものです。

言葉のキャッチボールを

日本人のことを理解していない外国人もいます。こういう時にこうすると日本人に喜ばれるということを知らせる機会を作ることも大事です。そのためにはコミュニケーション能力を高めていくことです。会話する能力や質問する能力などいろいろありますが、「言葉のキャッチボール」という便利な日本語があります。「おはようございます」に「おはようございます」と答える。これはキャッチボールです。でも、ボールが下に落ちる、キャッチする側が受け取らないと悲しくなります。つまりコミュニケーション能力は「傾聴力」と言い換えることができます。傾聴していると感じるためには三つのサインがあります。一つ目はうなづくこと。そこに相槌をつけると全然違います。二つ目は共感すること。何か共通の話題を見つかったり、自分の経験で「私もそれ知っている」とか「うちの子もそうなの」とか共感して聞くこと。三つ目は相手がした話を「こうなんだね」とか「それ最高だね」とまとめて返してあげることです。わかったことを絵に描いてあげたりすると、自分のことを伝えられ、外国人も心を寄せて皆さんのことを見てくれると思います。



「平成30年度 活動報告」 ご協力ありがとうございました



本市では「全ての人の人権が尊重される社会」を目指して、人権を尊重し合う市民のつどい(1回)、人権教育指導員研修会(5回)、社会人権教育研修会(3回)、指導主事の講師派遣(延べ61回)、啓発ビデオ(DVD)の貸し出し(3月13日現在延べ376本)、ラジオを通しての人権啓発(6回)を実施しました。

各研修会での講演内容につきましては各支所や隣保館の窓口にあります「人権啓発だより」をご覧ください。市民の皆さまのご協力に心から感謝いたします。